

高校 1 年生—自我に目覚めるころ—（その 4）

榎場 雅子

（臨床心理士・精神保健福祉士）

満開の桜の花の祝福を受けて入学した新 1 年生の上にも月日は流れて、瑞々しい若葉の頃を経て、その色も眩いほどの情熱的な万緑の季節を迎えました。

人の成長もまた年単位で、早春の花を思わせる学童期、瑞々しい新緑にも例えられる中学時代を過ぎて、万緑の頃と言われる高校時代を迎えます。男の子は一段と逞しく、女の子は更に美しく、青春真っ直中を思わせます。しかし、この期には、自分の生き方を見つけ出すという課題に悩み、時に青嵐にも例えられる疾風に襲われることがあります。

鈴木繁さん（仮名）は、現在 2 度目の高校 1 年生です。始めの高校 1 年生のときは（昨年度）、理想と現実の葛藤、心と体の発達のアンバランスのなかで、自分でも思いもかけない攻撃的衝動に襲われながら、その衝動を受け入れ、自分を見つめ、多くの人に出会って、階段を上るようにして自分のあるべき姿を模索し、作り出していく心の旅路でした。

繁さんとのつながりが始まったのは平成 28 年 9 月のこと、母親からの電話によるものでした。

息子は高校 1 年生ですが、不登校中です。合格した高校は世間的には超一流と言われる、人もうらやむ男子進学校でした。合格した時は、顔を真っ赤にして喜んだくせに、いざ授業が始まってみると、授業の進め方が納得できない。まるで受験のためのトレーニングのようで、高校の学習と言うには程遠い。生徒もそれを良しとして、テストの得点の競争相手というのか、ライバルに過ぎないと、もっともらしい理屈をつけて、ゴールデンウィーク後は登校を渋り、登校すると言って家を出ながら、近くの公園でぼんやりしているところを見つけ連れ帰ったこともあります。結局、出席日数不足で進級はおぼつかないと言われ、すべり止めにしていた某大学の付属校へ転向しました。

ところが、今度は、生徒の学力が低い、考えが幼稚だと言って、2 週間ほどで登校を渋るようになりました。加えて、男女共学校のため、男女の交際がオープンで、中にはペアを自他ともに任じているふたりも幾組かいる。「親も許しているのか?」と聞いたら、「遅れている!」と笑われてしまったと怒っていた。それを機に完全に不登校状態に陥り、「将来が見えない」と言って、自室に引きこもっています。親バカと笑われそうですが、こんなことになるまでは、親の言うことを素直に聞いて、成績もよく、問題ないと我が子を信じていたのに…、と嗚咽を漏らすのでした。

お母さんのおっしゃるように、お子さんは頭も良く、性格的にも素直に良く育ておられると思いました。それ故にこそ、発達心理学的にいう、青年期に課せられた、自分の生き方を見つけ出す課題を真正面から受け止めて悩んで苦しんでおられるのではないのでしょうか。一見すると、周りの人達を軽んじての反発のように見えますが、その実は、生真面目さ故の葛藤、模索ではないのでしょうか。一方、親御さんとしては、もともと素直で頭の良い子なるが故に、良い方向に向けてやるべきと、つつい力み過ぎてしまったところがあるのではないのでしょうか、と私的感想を述べるだけの対応で終わってしまいました。

それから3か月後、暮れも押し迫った12月某日に、繁さん本人から電話がありました。

K市に住む鈴木繁と言います。9月に母親が僕の不登校のことで相談したと思います。その際に、「高校生の学校への不満や不登校は一概に異常行動と決めつけず、青年期の発達過程で、理想と現実の葛藤、自分の力であるべき姿を作り出そうとして、親からの離脱を試みるひとつとして、不登校になることもある、親として力み過ぎないように」と言われた、と母が話してくれました。その一方で、母が精神科クリニックや教育相談所などに相談していたことも知っています。それらのことを踏まえた上で、自分としてはどうすべきかを模索した結果、改めて自分の意思で新しく志望校を見定め、受験し直すべきだと考えました。このまま復学しても、また転校しても、留年になり、1年が無駄になるのは必定だからと思いました。両親に相談したところ、父は「そこまで考えているなら」と言い、退学届の保護者欄に署名押印してくれました。母も黙って頷いてくれました。その両親の態度に、僕を信じてくれていると思いました。その根底にあるのは、母が相談したときの、先生の言葉だと思い、僕の決意を報告しておくべきだと思って電話しました、というものでした。

相談員として、繁さんが才能的にも恵まれ、大事に育ててくれている両親がいて、正しく育てていることを確信しました。繁さんにもその旨を伝え、電話を下さったことを感謝しました。

それから3ヶ月余、桜の蕾も脹らんで開花宣言を待つばかりのとき、「鈴木繁です」と名乗り、「1年ぶりで高校1年生になりました」との明るい報せがありました。新しく入学した学校は、モラロジーを旨とし、無味乾燥な受験勉強だけを重視するのではなく、クラブ活動も多種多様で、生徒会活動も盛んで、「僕が希望した学校を見てください」と誇りたい思いです、と結びました。

繁さんからのうれしい報せは更に続きます。1年半前に、元プロ野球の花形選手Kの覚醒剤の使用をめぐる逮捕起訴された事件に関連して、1ヶ月余にわたって、電話での対話を重ねた後に、この件を反面教師として、自らの進路として社会福祉士の道を選んだ上田一樹さん(仮名)の記事を本誌で採りあげたことがありました(28年11月号)。繁さんと上田さんとは子どもボランティアの仲間で、この高校を選ぶに当たって、上田さんが自信をもって自分の母校を勧めたそうです。そして私共の相談室のことも、上田先輩の紹介によるものと付け加えてくれました。

今さら解説めいて言うことではありませんが、高校時代は「親からの離脱」の大切な時期です。親からの離脱は、親を拒否することではなく、守られ束縛される関係から、心の絆で結ばれる関係に変化するときです。健全な関係の場合は、親への全面依存から、相互依存の関係に移ります。

○ あした子は 高校入学の式向かふ 八十葉の樹となれ 父もならむぞ 伊藤一彦『森羅の光』
伊藤一彦氏は心理学者で、現代歌壇の重鎮です。「八十葉」は「やそば」と読む古語で、緑の葉が豊かに繁っている様子を表します。柔軟にしなやかに繁る大樹になって欲しいと願っているのです。「父もならむぞ」という結句が、子の出発に贈る父の言葉に、この上もなく力を与えています。これをそのまま頂戴し、鈴木繁さん親子への祝福と励ましの言葉とさせていただきます。

〈こころの電話相談室〉

心の悩み、心のケア、心の健康に関する電話相談室をご利用下さい。

相談日 毎週木曜日 午前9時～午後9時

相談担当 榎場主任相談員 電話番号 04-7100-8369 個人情報厳正に取り扱います。

〈君たちはどう生きるか〉 ◆若者の生き方に感動しつつ、ふと、ある名著を思い出しました。◆世に出る前の準備中の15歳の少年が、周囲に好奇心を持ち、社会問題や矛盾を知り、挫折を経験し、人間の悩みと過ちと偉大さを学び成長していく物語です。◆この時期は、社会の役に立つ人になるため、なんの妨げもなく勉強ができ、自分の才能を思うままに伸ばしていけるときののです(h)。(独立行政法人福祉医療機構社会福祉振興助成事業)